アフターケア

En

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アフターケア

【Ｎコード】
Ｎ７９７９Ｚ

【作者名】
Ｅｎ

【あらすじ】
後日談と
仕事と
駅前の親父

十八禁要素皆無だから張りなおし

（前書き）

タイトルに意味なし
何となくアフターって入れて見たかっただけ

公平は大学にいた。
明日から冬休みだから今日から少しの間休みになる。
「憂鬱だ」
神田は公平に同情した。
昨日のパーティーで彼の彼女の、そして地球最強の生物であるXに弄ばれたからだ。
「まぁ、頑張れよ…。休み明けにまた会おうぜ」
『これが彼らの最後の会話であった』という言葉が浮かんだ。
一方、木之本は不思議そうな顔をしていた。
「お前ら休みなのに何でそんな暗い顔してんだよ。仕事が面倒だからか？」
「お前は、気絶してたから分からないだろうけどさ、あ、でも公平の彼女は見たよな？」
「…悪い。昨日飲み過ぎたのか家に入った直後からの事を覚えてないんだ」
…木之本は昨日のXについての記憶を失っていたらしい。
「そ、そうか。なら良いんだ。うん」
「本当に悪いな、公平。そうだ！これからお前の彼女にも謝らせてもらっても…」
「駄目だ！」
「…何だよぉ。怒鳴ることねぇだろ」
「あ…いや…昨日、あいつもはしゃぎすぎてな。風邪ひいたんだ」
「じゃあ、お見舞いに…」
「いや！あいつが誰も入れないように言ったんだ。風邪移すと悪いからって。これはあいつの意志だから誰も見舞いに行けない。面会謝絶だ」
「なんか悪いな…。お前の彼女の名前も顔も覚えてないってのは…。

にしても探し物ってなんだよ？それ言わなきゃ分かんないのに言い忘れやがって」
無報酬の仕事なのに文句を言いながらも熱心に取り組んでいる。
木之本は普段ふざけているが根は真面目な奴だ。

というより多分普段は少し無理してる。一緒につるんでいるとなんとなく分かるのだ。
「いや、無理しなくていい。お前は今のまま、ありのままを受け入れて良いんだ」
当然、これは彼が普段無理している事へでない。
Xに関しては忘れている方が、恐らく彼にとっては幸せなのだ。
木之本はトイレに向かった。
本来なら今日の予定はもう終わっているのだが、教授にこの部屋での作業を命じられたのだ。
大切な物を落としたので探したいのだが、教授は教授で今日は大事な用があるらしい。この部屋のある建物は老朽化が進んでいるため明日には壊すらしいから今日中に見つけないといけない。
この建物に誰もいないのもそのせいだ。
公平は、本来なら早く帰りたいがXに弄ばれるのが嫌なのでこの仕事をこなす事にしたのだ。
「なんか…あいつが羨ましいよ」
「そうだな…。公平は実家に帰るんだよな。」
「…多分」
「Xはどうするんだ。黙って出るのか？」
「後が恐いから取り敢えず話すよ」
「そうか…。はぁ、何で昨日あいつみたくすぐに気絶出来なかったんだろ…」
昨日気絶していた木之本は巨大な布団に寝かされた。
Xは別に心配していた訳ではない。ただ反応がないのがつまらない

から放置されただけだ。
そして、二人は料理の上に乗せられた。
Xは、皿から出たら次はもっと酷い事をすると脅してから、巨大な箸で二人を追いかけ回した。
少しずつ料理は食べられていき、逃げ場はなくなった。
そして足場の料理ごと二人を口に入れた。
そこでやっと神田は気絶した。
彼は後の事をもう覚えていない。
パーティーが終わったらしい時間に公平に起こされた。
隣にはまだ気絶している木之本がいて、その向こうに幸せそうなXの寝顔があった。
結局それからも木之本は起きなかった。
神田も酷く疲れていたため、公平の家に泊まることにした。
神田が気絶してから何があったのかを公平は決して話さなかった。
分かった事は、彼は最後まで気絶出来なかったという事だけだった。
神田はXと付き合う事になった理由を公平から話を聞いた。
神田はこの時本当に公平に同情した。
要約すれば『食べられる為に親密になったと思ったら食べられる理由なんかなかった』『Xに誰も殺して欲しくないと言ったら恋人になった、と思ったらいっそ殺された方がマシ、と思える位に毎日苛められた』という事らしい。
『「一生苛めてあげる」の苛めのレベルをちゃんと分かっていたらこんな事にはならなかった』とも言っていた。
だから、神田は公平に怒ったりはしない。
彼は毎日恐ろしい苛めの日々を過ごしているのだから。

木之本がトイレから戻って来たのと同時にズン、という音がした。
「何だ？今の音」
木之本が窓を開けた。

「…」
「木之本、何だった？」
「…」
「…木之本？」
木之本はこちらに向かって倒れてきた。
「木之本！？」
「しっかりしろ！おい！木之本！…駄目だ。気を失ってる…」
気づかなかったが音は少しずつこちらに向かって来ている。
「一体何が！？」
公平と神田は窓の向こうを見た。

正直言って音がした瞬間になんとなく何があるか分かっていた。
そして、木之本の気絶が確信させた。
此処まで来たら何が有るのか、いや、誰がいるのか、答えは一つだ。
「公平が帰ってくるのが遅いから迎えにきたよ～」
Xだ。
公平は瞬時に気づいた。
Xは相当怒っている。
「あ…あ…あ…」
「…神田？」
「え？」
「気絶した真似でもしてろ」
「お前…」
「早く！」
公平の覚悟は無駄にしない。
神田は倒れ込んで気絶したふりをした。
Xの笑顔が目の前に来た。
体育座りをしている。
因みにここは三階だ

「何で遅かったの？僕待ってたのに浮気？あぁ昨日の二人、そう、そいつ等といたから遅くなったの」
Xは言いながら木之本を摘み上げる。
「待て！木之本も神田も気絶してるんだぞ！今起こしたらショックでまた気絶するぞ！」
「大丈夫だよ。気絶したら酷い事になるって脅すから。トラウマになるくらいに」
「そんな…木之本が何をしたって…」
（ちょっと待って！？マジ！？これ寝てていいの！？）
「ほら起きて」
Xは木之本の体揺らした。
木之本が目を覚ました。
「うわぁ！」
Xは、彼の意識がとぶ直前に口を開いた。
「次に僕を見て気絶したら脚か腕が無くなってるよ」
Xは最後まで笑顔だった。
木之本は恐怖で意識を取り戻した。
「ご、ごめんなさい」
「まだ許さないから。はい、次」
「あぁーよく寝た！」
神田はヤケクソ気味に言った。
「何？寝たふりしてたの？」
Xの顔から笑顔が消えた。
「まさか…そんなわけ…」
Xは、木之本と同じように神田を摘み上げて目の前に持ってきた。
違うのは今、Xは笑っていないということ位か。
Xは立ち上がって言った。
「嘘つきは嫌いだよ。ところで君バンジージャンプ好き？紐なしの」
「ごめんなさい。本当にごめんなさい」
神田は何年か振りに泣いて謝った。

「ふん…。さて後は…」
Xは神田を木之本を握っている方の手に持ち替えながら言った。
再びしゃがんで教室を覗く。
公平はそこにいなかった。

「ヤバいヤバいヤバい」
今日のXの怒り方は変だ。
帰りが遅くなったのだって予定の三十分位だ。
ここまで怒られる筋合いはない。
「神田…木之本…済まない」
公平は…泣いていた。
友を救えぬ自分の弱さが悔しくて。
友を見捨てた自分の臆病が許せなくて。
後ろで何かが崩れる音がした。
Xが建物の向こうの端を踏み潰したのだ。
「いないなー」
Xの声が響く。
「そんな…俺を殺す気なのか？」
そして、Xは横になって建物の中をのぞき込んだ。
Xは公平と目が合うと、笑って立ち上がった。
「いた」
「うわぁぁ！」
公平は駆け出した。
「殺される…嫌だ！」
何でこうなった？
教授が何か無くしたから？
たまたまXの機嫌が悪かったのか？
それともこれが本当のXの残虐性か？
向こうから順に足が踏み下ろされる。

足がドンドン近づいて来る。
そうして端まで追い込まれた。
再びXが建物をのぞき込んだ。
笑っている。
「何で…？」
「最初の一回目を済ませたの」
は…？
どこかで聞いたような事を言う。
そういえばファルコの施設で聞いた気がする。
最初の一回目が一番勇気がいるとか何とか
「あ…」
この場合最初の一回目とは…
「神田と木之本は…？」
「食べちゃった♪」
公平は膝を落とした。
「そんな…嘘だ…」
「バイバイ♪」
「嘘だそんな事ー！」
そして公平の意識が途絶えた。

「…はっ！」
公平は目を覚ました。
「大丈夫…？」
Xが心配そうに見つめる。
「うわぁぁ！」
それでも今の公平には恐怖しかもたらさない。
「どうしよう…取り敢えず神田くんと木之本くんを…」
「あぁ…神田…木之本…俺が見捨てなければ…こんな…こんな…」
「おう。反省したか？」

「あぁ…済まない…済まない…」
「じゃあ許してやろうか」
「そうだな」
「ありがと…う？」
顔を上げると其処には神田と木之本がいた。
「幽霊！？」
「ちげえよ。馬鹿！」
ハハハと二人は笑い合った。
「え？え？どういうこと…」
「ごめんね…ちょっとしたドッキリのつもりだったんだけど」
「どっきり？」
「やり過ぎたみたいだね…」
「ハハハ…ハ、ハ、H」
酷い安心と馬鹿馬鹿しさと意味不明さが公平はまた気絶させた。

次に目を覚ましたのはXの家でだった。
「本当にごめん！」
Xが土下座みたいな形で謝る。
ここまでされたら怒る気にもならない。
それから、Xが今回のドッキリについて話した。
全てはXが大学の建物の取り壊しの仕事をする事になったことから始まる。

元々、Xは建物の取り壊しの仕事をしていた。
今回大学講内の建物の取り壊しを頼まれた。
クリスマスパーティーの後まるで逃げたような神田や自分を見てすぐに気絶した木之本とも仲良くなりたいと思った。

それでついでに公平も巻き込んだドッキリでも仕掛けようと考えた。
建物の取り壊しの担当の大学教授に、こういう事がしたいと告げると意外にも乗り気になって公平たちがそこに留まるよう、嘘の頼みをした。
初めは神田と木之本を驚かしてお終いのつもりだったが、Xの演技があまりに迫真だった事が誤算だった。
公平が二人を見捨てたのだ。
これに神田と木之本は怒った。
取り敢えずXが神田と木之本に種明かしすると次はあいつにドッキリ仕掛けろと即興で手順を考えた。
大学教授は、建物はいつ取り壊しても同じ、どうせ誰もいない、やるなら全力で、と一日早い取り壊しを許可したのでドッキリを実行に移せたのだ。

「そしてああなったと…」
聞いてて悲しくなった。
「まぁそもそもお前が俺たちを見捨てたのが悪い訳で」
「う…」
「本当びっくりしたぜ？Xがしゃがんで部屋の中見たらお前いないんだもん」
「昨日の電話の時から分かってたけどさ、何だかんだお前は薄情な奴なんだよ。あれくらいしないと釣り合わねぇよ」
「明らかに俺のダメージ大きいぞ！下手したら一生トラウマだぞ！」
「ごめんなさい…」
「もうXは謝らなくて良いよ。ドッキリの後半の部分を考えたのも提案したのも俺らだし」
「木之本随分Xに馴染んだな」
「普通に良い奴つみたいだし、公平消えてからすぐ謝ってくれたし」

「もう許してくれよ！悪かったよ！本当に！」
「じゃあ後でラーメンでも奢れよ」
「分かったよ…」
「らーめん？」
「X、もしかしてラーメン食べたこと無いのか？」
「公平はXの分も奢れよ」
「無理に決まってんだろ！俺らの一杯がコイツの一口だぞ！」
「奢って貰わなくてもお金あるから…」「…待てよ。駅前のラーメン屋ってジャンボラーメンとか言うチャレンジがあったよな。三十分以内に食べきったらラーメンタダにして十一万円とかの」
「ああ有るな」
「Xなら一口か…」
「！」
「！」
「？」
「よし、駅前行こう」
「待てよ」
「奢りになってねーぞ」
「え？ジャンボラーメンって何？おいしいの？」
「良かったな。X。上手くいけば美味いラーメン好きなだけ食べられるぞ」
「本当！？」
「おい、待てって！」
「お前はXに美味いラーメンを食べさせてやりたいと思わないのか！？お前らそんなに薄情な奴らなのかよ！？」
「ねぇみんな？早く行こうよ。僕お腹空いてきたよ」
「…しょうがない。行くか」
「駅前の親父も可哀想にな…」

終わり

（後書き）

思いついたから即興で書いた。
後悔しかしていない

X「ラーメンおいしかったです」
公平「まさか上手くいくとは」
親父「クソ…クソ…」
神田「可哀想に…」
木之本「親父のアフターケアが必要だな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7979z/

アフターケア

2011年12月25日17時45分発行